

寶東古錢錄

七



關東古戦録卷之七

目録

一 足利大郎畿内国游あしかが たいらう 畿内 くに ぶら

附 受領并 濱田五郎事うけつり ならび はまのた ごろう こと

二 山形八郎出羽國に之騎射事やまがた ぱちらう 出羽 くに に 之 騎射 こと

附 危難に逢事あやふし げん におひ こと

三 長尾為明討畧那須勢敗軍事

関東古戦録卷之七

足利太郎 畿内周游 受領

并 淡田五郎事

去程に足利太郎ハ長尾為明ガ勸ニ由りて母公に服乞あ
つて原根本を始として留主中の志満り念曉よおれを令
ト長尾城戸主人を召集し下部三四人と密に出立向り旅
途についで沼海の小川廣原硖海長尾一くに指して備の
配り陣營の掛やう。素兵の備細に熟り快く早蕨徳海に出
る時越後の志臣宇佐次河守京浩より帰國にて人数を
伺とめて通りければ三人片陰にありてこれを見るに帯
の妙術と云へた。人数の列足並を携へ誘致尾一連して
其智謀正にいちぢる。既に宇佐次が馬主前に至ると告

備録

ぶゆいりてまゝゆず長尾ハ川と心付て急に右馬を押隠
 せば宇佐兵が馬えの如くに進行駿河守ハ川と見やり暫
 馬を立けるがさりげなく糸出でて遙に行過ぬ後に駿河
 守近臣に語りし由馬進ぶる時よあつたて一人の男其主
 人と實に死を隠しこれハ馬定えに腹とぞ討我見を伺ふ
 に彼主人の政上一條の白光有て吾眼を射る殊更吾人
 の士ハ威儀堂々として智謀を深し眼光青天ハ徹とぞ双
 の智者也今一人ハ勇猛義氣英風沛男に現る天下の奇
 物吾いほごうくの如不剛の微ある者を見とぞ形相東國
 の人あり百一彼等物をゆい誰か歎するとをゆんや給ハ
 主君大業の嫡ともあるべし。ちとぞ糧藉に事とせて切捕
 んと思はる英士の窮寇恐くハ人教多く損とべし。且川人

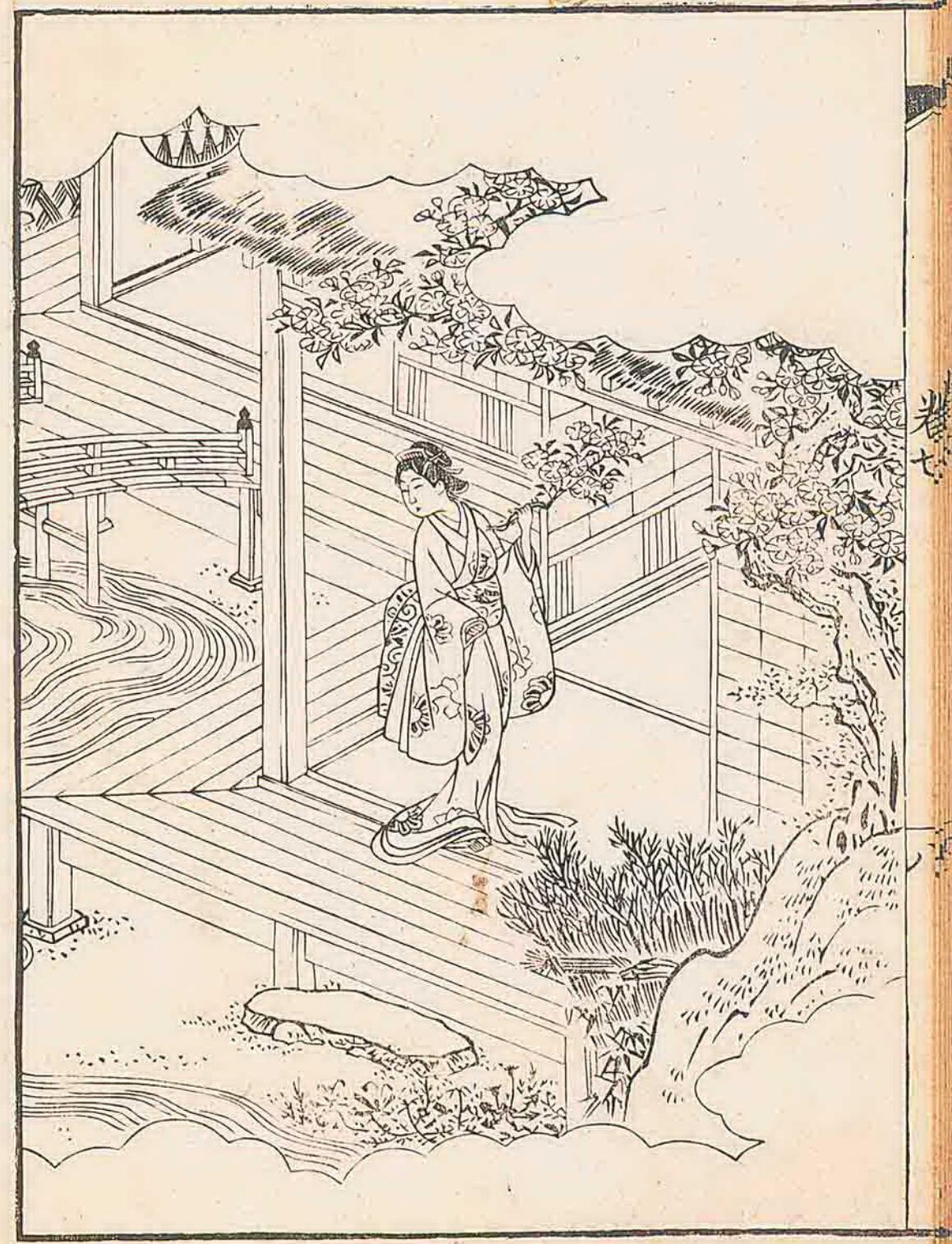
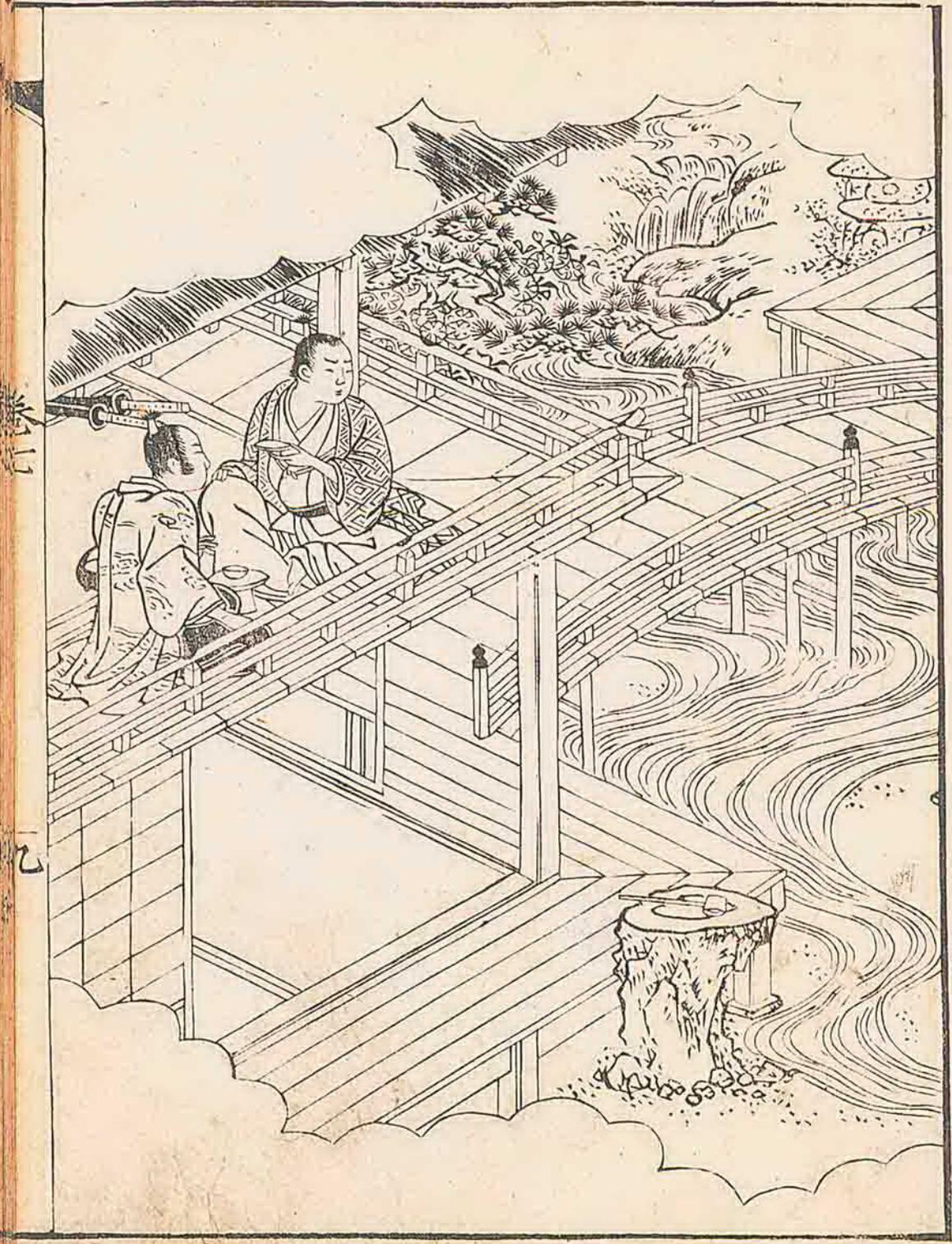
るの盛衰ハ天ハ繋れり吾亦捕らず其命救極りあらハ彼等
 大業をあるとあつた百一天命彼にあらハ吾亦亦取とを
 不為怒に無道の働をささんハ勇士の恥る所ありと思止り
 一と云長尾ハ物を見送て危哉吾曹已に宇佐兵が手に死
 せんと思はる誠にも天授あり城戸其旅を回ふに長尾谷今宇
 佐兵が馬を止し討已に君を討人の命をあらはれりいと思ひ
 車とせん何事か許さハ正ふ幸ありと悟りて夫より英法海を
 越え京洛に入るにぐる戦國の時と云ハ山ハ清らに人亦亦
 郡あり京都に偶居して暫く滞るある固ふ志づく酬諱ありと
 云ハ其長尾あらはれ謀て危難をさけ彼是と心掛れた一人倡
 べし英士もあし或時長尾ハ下郡一人を石連て播及取り
 都よハ太良主従日く名山川を馳て其景色を樂む一日東

れず自ら命を捨てば人小憐れなり。死目も兼て苦痛あり。元
 来自らより求めては契縁ありてなれば。彼人に死せりと
 女も己らるれば。癖をけきハ老婦も一先去れをせしめ
 太郎に達して後破せんと。生布へ来るふ沈解して。床中に何
 已おた厚風を掛けハ。白光床中に満て。眼くらみ。結くれば
 太郎が改上より。一條の白毛燭くと。あうりれり。老婦も
 忍れて。覺と色を上るに。太郎夢さめ。起これハ。老婦平伏
 して。君ハ凡人にあらず。彼娘ハ止家の息女なれ。大に家
 貧乏にして。某を頼み。三好家へ奉りて。お謝金を分川約束
 あり。然るに予ハ。此の縁に由りて。君と相馴て。死を極て。我
 言に従はせ。是に因て。君の心を引見んと。来りみるに。不思議
 儀詞よ。君とべうこと。是天縁あり。娘は君にまじひし人。に

金錢を捨て。その家残す。川がハ。後難ある。魚うらむ。此後君
 時をゆハ。必老女。残す。余は。いと念ひに述べ。れハ。老
 郎甚は。此の縁に由りて。その家への贈物ハ。よさにあすべしと
 うけがひて。是より。帰る。可なく。彼娘と。晝夜。歡楽を。盡して。
 大業の。とも。心に。既に。磨せり。城戸。折。凍む。と云も。是又
 若年の。情。女。女の。貞。心。にか。つ。て。う。う。く。う。て。世。目。に。あ
 ゆる。長尾ハ。播。忍。に。所。有。て。ト。り。相。識。の。民。人。富。貴。ある
 に。使。り。て。旅。利。の。金。を。調。へ。後。来。軍。用。の。事。迄。相。約。して。京。都
 に。ゆ。れ。ハ。旅。者。に。ハ。下。部。一。人。あ。り。て。は。る。太。郎。并。城。戸。行
 跡。娼。家。に。日。夜。送。る。と。残。具。に。之。れ。ハ。長。尾。大。に。擔。を。け。し。
 坂。東。の。人。ハ。極。て。剛。に。し。て。京。洛。よ。来。れ。ハ。婦。人。の。為。に。精。神
 を。こ。ろ。ろ。す。と。古。今。一。致。あり。何。者。の。狐。狸。ハ。世。怪。を。か。き。と

里多あり物なきなる人こそあれ先試におれ持多くと四
十貫目もあるべき石を煙くと引上て差出せハ城戸突て
片手をひておれを誘とりぬり廻して大地にをく彼男大
に驚き志くらバ角力にて試んと大手を廣て紐付を思の
傍に抱くせし片手を伸して帯をつうんて引上れハ流石
の彌師お是地を放れて猿をつらせし如まてかこころハ
と投出せハ起上て平伏し君ハ日本一ありといふに城戸
お笑て我友に一色太尉お弟門と云者お某う如き者三
人掛れ大驚に務ゆるとまじと云へど倍威伏して義連の
足下とあらんと云ふ姓名を問へど云浦家の浪人演田お
良と云者也竟お君臣の約をふして竹符紙あこハ城に
君の起る所ハ東國を相忘せり英徳ありして吾人の英士

を刃ぞ相刃に入て一力士をぬりりと為明候て山を下り
小田原の入口ふて五良ハ暇終て町奉行ハ集會せんとお
し小田原へ来れハ城主氏康上及へ後向のりしこれ憲政
故亡の時全れアとをれあり武藏に編りたを急三十月に
及て上及へ君おへり書尾ハ直に下野に至り義連の鎧定
て馳来らんし物去れり母公真奥と大に悦喜あつて
互に無事を語り一色惣堀相侍も熊谷堤の東小幡地お
いて鎧脱に出来せりと嘉浪をひて申越たりとありけき
ハ義連大に悦喜し目を撰で秘使ある母公真方ハ興義連
ハ馬よきて城戸次郎太郎を始嘉浪ハ下義勇の士十五騎
前後を因そ外義黨數百人所侍也一色太尉お遠門等
塚熊太良奉立と出迎に出たやうに鎧を入りぬハ義連



柵塚を圍て長尾方使首を命じ山形小楯鹿嶋にも早々
集令をせよと云き松にねを初くとありけしバ柵塚に畏て
下野の國へ急けり

山形八郎出羽國に之驍射事危難に達す

出羽國山形の城主八代々山形出羽守と号す當主英明に
して奥羽を春の氣を去れりて城外に乃場を立て
天下武藝の達人武者修治する者を夜に養て家中の志士
と其業を試み猿を石抱へばよぶ家を禱しをむこ
れ小國て武人此地を以て晴業として往々に集り来ると
之へたを藩士に勝とありて取をとりて去る者多し惡
典膳との角る劍術者其業務れ諸士も又貴族も暫く之
に滞留しぬ山形八郎季照え來當家の氏族をれた父祖狼

級して珍異に沈淪を生て容顏いづくことをやうに
て自ら風流を以て知るに不通の大力をて殊に弓馬の術方
人に勝る曾て我連に伝とるつと長尾の明に固て忠義の
英士あり此地に來て不用を洞業以て英士を求んとて
乃場に至ると云へた云形相如人の如く溫和寡言なれば
只其秀藤を稱して其業を知者あり或時典膳諸士を集
て其業に慢しおとろく十間を隔て八右の楯人為期うり
劣ありたを矢を切打て方に立るとあるべうとてと虎言
を吐ければ八郎これを圍てあら勅し河をなぬ大具に
遠近の業あり人に功拙あり劍を以て槍に勝んとするべ
に術者の取る所あり况らと相對せんと言ふると云に其
業を不知に似たり某弓馬強くをせた槍刃の術にたり

弓を以て相對せハ吉の泉の小次郎。即比索あり。其只一
 劣の下に命を止ん。況や後世の士。其をやとあてく。云
 放せハ典膳甚怒りて。論無益あり。互合ふて。雌雄を決せん
 と云ハ。即笑て。足下狂言なり。我ハ第一射。既とも身に害を
 く。足下ハ一箭に命終ん。然ハ無用の犬死に。あらむやと云
 に。典膳きこふ。其外の諸士も。いづて。典膳危と。あらん
 と。色々に言れハ。八郎も。控方を。強きハ。始よ。約する。と。何
 也。只。切折と。切折られ。どの。争あり。幸に。足下を。射殺ん
 もせん。や。志す。矢。杖。輕。根を。丸めて。手心を。以て。放さ
 ハ。身に。中に。害を。うらん。跡にて。弓。勢ハ。別に。あらハ。中。べ
 と。諸士に。理害を。後て。既。に。立。り。れ。典膳。木刀。引。て。眼を
 配て。立。る。有。根。葉。に。勇。極。の。勢。あり。山。形。も。弓。と。矢。取。扱。て

志。け。く。と。立。向。間。十。間。に。して。典。膳。い。ざ。と。色。う。れ。ハ。八。郎
 急。り。と。切。て。放。せ。電。光。う。り。控。早。く。獨。板。に。ハ。と。伸。る。つ
 つけ。板。に。七。八。奉。同。一。矢。坪。を。射。も。不。遠。射。を。と。め。り。さ。れ
 大。槍。の。洞。の。如。く。矢。中。て。女。も。痛。を。啗。大。に。感。ぜ。れ。ハ。典。膳
 打。笑。て。弓。矢。う。り。く。小。弓。の。調。子。も。故。小。か。くの。如。く。万。一
 身。に。互。程。の。矢。あ。り。ハ。何。条。切。筋。さ。す。と。云。と。子。う。らん。と。女
 も。屈。せず。晒。へ。を。諸。士。一。回。に。八。郎。の。弓。勢。の。程。あ。ら。く。こ
 ま。と。い。ふ。に。ハ。席。心。得。り。と。典。膳。へ。射。掛。し。矢。を。つ。う。ハ。側
 の。大。石。へ。引。志。が。り。て。切。て。放。せ。バ。矢。ハ。流。星。の。如。く。青。目。の
 石。へ。射。れ。と。通。り。羽。際。と。射。の。り。法。士。腕。を。冷。し。舌。を。吐。て
 俄。に。古。今。の。弓。勢。と。一。回。に。感。費。せ。れ。ハ。典。膳。も。心。大。に。屈。せ
 れ。大。空。味。で。重。き。う。り。し。が。亦。立。上。て。弓。術。を。と。れ。り。と。云

先手結に之のてをあくど歌に討れむハ武の不心掛と云
 つべし多とくハ我角の如く流きて正面より打掛らハ足
 下いかに働んやハ郎風より流きてりとして何程の事かあ
 らん亦真向を打れんと女も撓すよとゆれハ典儀ゆより
 とゆつゝくらに打掛るを引強くてつと入大の男を引
 搦んと一二番投出せりこれか人長尾の傳し奉法の術を
 り典儀多の如くに起より寂早是迄ありと亦死掛るをハ
 良弓を引かひて正面に看向ハ神書の如術を引
 當て典儀を引かひてまよまよとみになりぬ諸人中に立て彼
 是と取つくらひ和流のて其日ハ海ぬあれより典儀ふ
 くらく如く思て仇をそとの心生くらり去程に家士始て
 八郎の術を見て音をふるハ物奉りに達して城主これ

を圍むハ騎射の術を一免せんと荒本内苑と云る家老に
 命じけれハ荒本八郎を招て生國氏系を尋るに即主人の
 氏族内縁甚まうらざれば相受丁寧に管應し目限を招て
 其術を見物ある棧布を搦へて城主一族をた右にむきハ
 てまゝのハ太手の方へ扇を下して奥方の見物ありて
 れより徳家の見物整固列を平百世名の馬場にハ的を
 ま既小利限にされバ山形ハ扇書照緋名城の狸射書を
 を引白絹の袴巻して態と甲ハ着ざりける既く及の矢毫
 に重森の弓を横くハ荒本が仕立るる奥お約の里毛に
 て太く逞きに唐靴かうと静くと糸出せし有る内容能
 潔小して眼さ常るらず先馬小場をあらうん福地あり
 をます人馬相應して一絆の如く二三通案横し色を掛て

逸氣に逸出し、弓取て引加へ、射出せし矢的の支守を費さへ
 後八中おどろきあへ、あつくと業治せ、城主始一同に感賞
 暫く止むとあへ、それより里に任せ、引馬の術のある
 所なく、業を盡せば、日本一の名人と、知も不知も、莫者とい
 城主席を改めて、北面あり、念以に挨拶あせ、荒木側より、
 系氏を述べ、城主大に驚き、あつと、お祝き一族なり、荒
 木方に滞るある處くと、種々の賜物あり、諸君の儀、御座
 く、荒木に命じ、これより、八郎、荒木が書院、一回、成居、而
 て、密に英士を求ける、翡翠、八郎を、い、其身を害せ、八郎、
 照、武術の達し、するの、も、なら、ず、次、藤並、る、く、割、へ、和、方、の、乃
 に、加、へ、あ、く、風流の英士、る、れ、バ、一、藩、の、婦、女、魂、を、奪、へ、ん、の
 て、便、を、求、て、絶、書、數、通、に、あ、は、り、八、郎、男、を、正、しく、密、に、あ

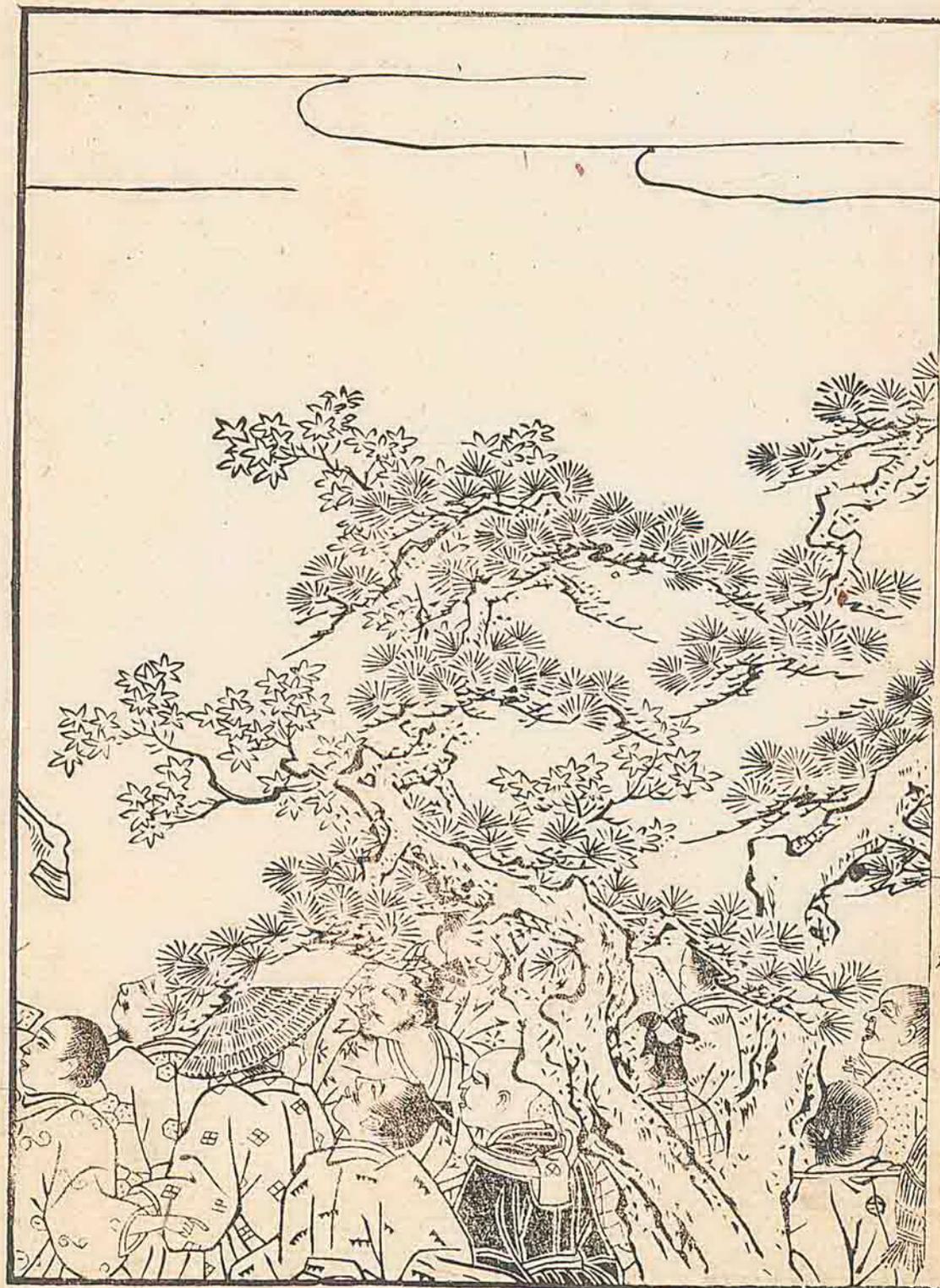
れを荒木へ達し、聊も念に引る事なし、爰に、荒木が娘あ
 り、尚年十七歳、艶、花、を、む、る、く、心、剛、に、情、深、く、時、に、ふ、れ
 折ふ、ゆ、て、八、郎、を、刀、深、意、慕、の、ま、づ、か、頻、りに、至、り、偶、武、家
 の、娘、と、な、り、夫、に、従、ん、と、あ、ら、バ、季、照、の、め、さ、こ、そ、誠、小、文
 武の士なり、あ、と、い、事、不、信、と、死、せ、る、と、も、吾、志、願、を、達、せ
 ん、と、文、と、あ、く、と、徳、て、八、郎、と、真、より、立、出、る、と、き、袂、へ、投、入
 たり、書、院、へ、ゆ、り、八、郎、を、披、て、誇、ふ、心、何、に、餘、り、密、通、の、惡
 事、ある、を、知、と、云、た、ぞ、情、の、ま、ま、難、き、命、を、捨、て、従、ん、の、誓、理
 を、尽、し、事、を、な、る、情、の、ま、ま、り、か、流、石、の、八、郎、も、此、絶、書
 に、心、れ、娘、平、生、の、行、事、剛、く、て、容、顔、亦、世、に、絶、れ、れ、ハ、
 ち、後、來、人、口、に、乘、る、と、て、ま、心、に、従、た、や、と、思、ひ、深、く
 る、七、福、の、基、を、れ、く、と、う、う、す、返、書、徳、て、人、知、れ、を、矯、り、け、れ

ハ娘ハ大に悦て。数日の禁れも一対小用け。是よりあつて。て。車により真にふき。おをわたり。書を返りて。借光の約。定りぬ。此ハ三月上巳。忌本一家。曲水の宴ありて。諸人。碁を。及し。後。小入て。停去ぬ。此。回。仇。讐。の。期。ありて。娘。思。て。書。院。に。来り。ハ。扇。と。相。逢。て。た。に。心。情。を。語り。一。夜。を。お。夜。の。禁。れ。に。出。て。それ。より。幾。麻。答。答。比。翼。の。如。し。好。交。す。と。お。た。小。い。う。と。家。内。稍。と。事。を。痛。く。も。更。女。好。男。む。敵。と。あ。る。べ。し。と。妨。る。者。一。人。も。あ。く。知。て。と。媒。と。る。者。を。あ。は。れ。交。に。同。藩。云。宅。某。が。嫡。子。平。馬。と。い。ふ。子。を。お。せ。者。何。り。兼。て。荒。木。が。娘。の。絶。る。に。心。を。掛。て。折。ぐ。云。よ。れ。た。一。園。と。合。点。せ。す。父。に。お。て。内。藏。へ。云。込。夫。妻。と。せ。んと。す。れ。た。荒。木。亦。も。人。と。あり。を。思。て。承。り。せ。せ。是。小。因。と。常。に。恨。を。含。む。ハ。平。馬。ハ。思。曲。孫。が。

門人にて。同。相。求。て。常。に。祝。り。け。る。或。時。典。孫。平。馬。に。向。て。足。下。知。ぬ。ハ。お。や。荒。木。が。娘。こ。そ。山。形。ハ。扇。と。密。會。して。あ。ら。ぬ。中。と。き。く。万。一。彼。と。妻。娘。と。を。ら。ハ。足。下。士。の。一。分。を。ま。ぎ。さ。そ。一。つ。着。あ。れ。し。と。悪。の。腰。押。一。言。に。平。馬。好。情。頻。お。して。い。事。い。か。ある。處。さ。う。と。人。志。を。さ。し。ハ。扇。を。切。捨。て。悪。の。意。趣。を。晴。す。へ。偏。は。君。の。助。力。を。頼。ふ。と。思。込。て。云。け。れ。ハ。典。孫。色。を。低。して。ハ。扇。が。武。勇。中。く。お。く。う。多。際。に。お。る。者。を。ら。す。う。を。た。と。我。仕。出。して。却。て。孫。を。取。あ。ら。バ。悔。も。帰。り。し。只。芳。せ。す。して。飛。に。落。と。手。取。あり。と。密。に。一。柵。を。叫。々。ハ。平。馬。大。小。悦。て。お。れ。より。あ。人。お。寄。て。荒。木。を。借。せ。り。城。主。の。妻。に。元。來。京。都。の。出。生。に。く。色。好。と。の。女。あり。城。主。始。竈。あり。し。う。其。好。情。を。踏。ぐ。拈。ぐ。と。あり。ぬ。等。と。人。

むぐめる女物のまゝとめられさ時にとて。悪念の手引と
 ありぬ。去るに八郎が騎射の時。其苦量を見て。色好しの
 情より難て。度々艶書をかくれた。八郎是を去るの浮沈と
 其度に封も不切。一々荒本へ渡しぬ。典膳平馬の角を去る
 也。八郎が手紙をむそくに多し。彼女へ艶書を付しり。此保
 ハハ女絶て城主へ達せし。及に八郎が不義とならん
 との巧あり。彼女ハ数度の文一度の返事もなければ。お
 ら又希る所に。おとさる八郎が文に。猶とあきて。披見
 るに。限りなく書は従ふ。備は去りし女の達せりし
 我思の程を。おせん。心のしけを書けし。自ら小指を
 切て封也。彼媒よ。おらりぬ。彼者より。平馬に渡せば。案に
 相違して。披見るに。空恐し。誓をきて。末の松山波こま

うららじと書つらねて。小指を添て封しり。急ら典膳を指
 と。これを讀するに。典膳笑を合て。時至れり。此文を城主性
 来の廊下に。捨たぐへ。と云。教へ。近士の内後心のオ子に
 兼て云。含め。おに。おきて。八郎が好色の病あると。後しぬ
 明月の光も雲に掩れ。暫暗夜とある。城主一朝廊下にお
 めて。此文を拾ひ。お見るに。返書にて。其情。悉く。あする。文。飾
 見。知ある。妾の。お。指。を。れ。ハ。一。封。の。怒。止。ま。ご。こ。く。早。速。荒。本
 を。取。て。八。郎。が。不。義。を。攻。ら。う。に。荒。本。心。得。て。先。達。て。の。艶
 書。を。送。り。封。の。儀。差。出。し。八。郎。が。心。掛。め。は。と。り。上。る。い。や。く
 此。文。件。ハ。返。事。あり。必。八。郎。が。方。より。文。を。送。り。し。と。お。わ。り
 たり。と。急。に。彼。妾。に。せ。ゆ。り。て。彼。艶。書。を。揮。り。ゆ。て。荒。本。に。示
 せ。荒。本。怒。り。て。俄。お。八。郎。が。手。紙。に。似。れ。た。必。要。事。あり。



彼ら武術を以て者甚多とまゝに必定彼等が仕業とて之を
と申ければ。城主も滅にたあるとも阿らんない。暫事の
やうも何んと。一旦事静るといふに。衆は金を採りて荒木娘
を以て。八郎の事とあそびに掛る不義を押しくせよとん
と云立る。小あつて。城主信利なりといふも。人口を塞んぬ
るあり。八郎を他國へ送る處と。何事をも申渡りけ
れ。荒木も詮方なく。八郎に右のあやを相借し。何國へ
去りぬ。んと同く。八郎數日の恩を附し。海川下降る。立
歸んと。早々に旅立。娘の心の地して。涙のこみゆき。
妻へ入る。お郎ぬ。八郎思ひぬ。浮志を流し。心ちよく山形を
立出て。十里計。出でて。頼小荒木が娘の情忘れをむむ
もなく。細さ橋に。かき掛り。ひらた。一町よ。あれて。川中へさ

んぶと。あつ。のり。と云て。立上らんとせし。所ふ。思も。あつ。と
之。四人を。り。重り。水。中。に。て。あ。ん。なく。八。郎。を。搦。捕。し。て。り
季。照。齒。を。み。をか。して。見。て。わ。れ。八。郎。忠。典。孫。三。宅。平。馬。あ。つ。と
ゆ。と。に。身。か。り。は。附。の。む。い。う。に。そ。や。婦。女。を。能。て。好。色。の。謀
を。廻。と。と。武。士。の。計。畧。と。懸。隔。ならん。幸。く。引。連。て。切。捨。ん
と。と。それ。より。纒。を。増。し。引。立。て。白。河。領。に。を。く。深。村。あり。け
る。中。へ。引。入。て。大。本。に。あ。つ。と。う。に。傳。付。二。人。ハ。民。居。に。入。て
食。事。を。な。す。附。居。る。伴。同。ハ。八。郎。の。顔。色。を。つ。ら。く。見。て。君。ハ
天下。の。美。男。あり。主人。を。う。ら。ん。人。知。れ。ど。君。を。殺。ん。と。ま。る。ハ
無。乃。あり。然。を。君。を。物。も。時。ハ。吾。身。妻。子。立。所。に。命。を。失。ふ。せ
めて。云。置。と。あ。ら。ハ。傳。て。ゆ。い。ら。せん。と。い。ひ。つ。ら。ふ。ハ。八。郎。眼。を
閉。て。昏。り。し。う。大。小。脱。て。流。る。う。ぬ。志。う。を。死。て。後。下。野。國

宇都宮に、長尾監物と云ふ人あり、此方へ山形八郎非業の
死を遂とりと傳へられ、念以に頼む内、系馬典膳が
来て、いてや、まに、目以の替換を教まへ、系馬典膳の仇業
ハ業の仇討とて来れりと、た右より、太刀引搦て、立かゝる
今の山形が、會佛鼎の魚の如くあり、時に大木の影より、
健ある、矢を射る如くに、矢出て、系馬典膳を、た右へ、
のけ、仁王立に、突立、バ、典膳怒て、何者を、れ、科人の、方人、
すと、太刀ハ、相に、構て、切らるるを、彼士、完宗と、突ひ、太刀、
ひく、これに、掛れ、ハ、典膳が、太刀、先、右に、乱れ、あ、り、討、
んとする、内、に、う、ひ、ら、ひ、て、逃て、行、追、欠んと、する、所、を、系
馬と、する、後、より、切、あ、る、を、ひ、ら、ひ、と、する、真、向、前
に、切、割て、立、ぬて、八、郎、を、繩、切、か、と、け、ハ、八、郎、矢、に、驚、て、何、人

を、れ、ハ、某、が、危、難、を、と、ら、ひ、持、に、知、術、の、妙、凡、人、あ、り、ず、姓、名
某、と、い、ひ、な、れ、ハ、某、ハ、麻、嶋、悪、次、郎、と、申、を、の、に、て、長、尾、
時、と、我、を、信、入、足、利、太、郎、と、の、乃、臣、下、と、な、れ、り、我、君、の、令、令
は、と、貴、前、を、尋、て、り、し、り、先、刻、下、部、へ、の、物、詰、に、て、山、形
殿、と、い、知、ひ、ら、り、借、も、危、と、仕、合、と、あ、人、大、と、悦、で、彼、下、部、に
金、鎧、を、と、ら、せ、荒、木、方、へ、一、通、を、徳、で、相、渡、し、山、形、に、く、の、始
末、俱、に、借、れ、バ、悪、次、郎、打、突、て、足、下、の、黄、藤、行、る、ぞ、王、に、密、に
且、と、あ、人、借、方、に、立、出、ん、と、す、る、所、に、盗、賊、七、八、人、老、人、の、侍
と、若、さ、女、を、引、連、て、引、立、行、有、根、見、り、麻、嶋、堪、う、孫、で、死、掛
て、二、三、人、を、投、の、け、れ、ハ、八、郎、も、同、く、あ、人、投、倒、し、や、を、
御、け、足、て、あ、れ、ハ、荒、木、の、息、女、並、善、代、の、家、来、あり、八、郎、大、に
怪、ん、て、次、子、を、同、や、し、内、藏、方、より、の、一、通、あり、娘、の、縁、に、よ

つて、い度中用取らざるをくやみ、慈慕の娘定をゆふとた
 れた死を極めるゆより、一向き西へ送り、志操を述さそ
 んと一人の家来に中付送りせむ由なり、娘ハ八郎を足る
 よりも悲喜ともに至り、面付涙を流し、計也時に盜賊在二
 回に立上り、切先を帯て切られ、悪次郎打死し、入て
 久さよき慰とたちに愛附切あし、ゆきく、るに、四人の
 盜賊八段とせり、く怪伏せ、八郎もいさんて切て出、是も二
 人を切殺、ま回に一人の盜賊、荒木が娘に切掛るを、女も恐
 る用意の刀引、抜て、若殺付入て、腕打落し、あんぢく、とこに
 切とめ、り、跡る、奴原悪次郎、追追、跡らず切捨、立ゆて、娘
 の働に感入り、悪次郎、跡にて、此所まで、夫婦とせり、四人
 一所に打連て、下野國へ急けり

長尾為明計畧那須勢敗軍事

爰に下野國烏山の城主那須壹政守政賢ハ、世々の名家に
 て、武勇を國に懸けり、或時一族長臣を召集て、今我國の事
 について、奥羽常陸の大敵と常に合戦し、殊に同國宇津郡宮
 後綱と不快にして、稍もそれハ、闘陣に及んと、幸に信ね
 の武勇に、あつて、家聲をた、た、世といふ、家計を以て、社
 稷を安し、保んとせ、けれハ、伊王郡下総守を、出で、申け、家ハ
 尚家の弓矢を以て、八方の敵に當て、た、これを、と、と、とい
 へ、共、胸を、國を、家の、謀に、之、某、あり、よ、に、一人の、謀士を、得
 て、國家を、維持、兵を、練、ら、歩、家長、之の、基、ならん、と、述、け
 れ、ハ、大、回、系、山城、守、これ、を、守、て、後、兵、の、異、見、突、に、難、備、あり、
 名、士、遠、に、あ、る、某、密、に、あ、る、た、宇、都、宮、の、城、下、離、れ、よ、長、尾

監物為明と云る智謀名譽の賢人あり天文を明らめ地理
 に委く軍畧古今に卓絶せり自ら其智をうらめしめて、主人
 の器用を擧げて、力を養ふとなせり。此者万一後繼に
 仕へて、控謀を廻らさば、頗る自家の害らるべし。諸將を
 知りぬるやと云に、予常陸ゆめもあらず、某既にして者
 を圖及へりいほぐ其智才の信疑を各人ど何事なく、石
 のひ其争を計て、賢あらう、意く勇へし不賢あらう、追放ん
 と事もおげにやけふを、政賞とゆくと、圖面け諸將の備を
 る所、我も既にすかれり、死たあらく、石呼く、来るべし者と
 覺ふも、兵士を擧げて使者と申、其心をこころみ、遊ハ
 臣と申、靜退せば早く打捨て、後來の禍を除くべしと
 有ければ、と將承て、君の上意、言に、圖に付へりと、徳士を

擧て、平野、主計と云る、兵士の小高物を多く取揃へ、使者
 として、主計を引み、さして、後て、國奉左、清門に、百餘騎を、授
 て、進と号して、里敷をへ、さして、さして、ゆせ、若長尾、靜退せば、
 主計、立つて、國奉に、おれを、告げ、直に、押寄、油、改の、所を、攻
 撃、擧捕、て、来るべし、と、い、從、悉く、備、て、お、士、既、に、打、た、り、
 敵、て、主、計、の、道、を、急、さ、毛、尾、之、家、に、至、り、葉、田、を、請、け、れ、し、
 市、に、通、し、監、物、早、速、立、出、て、懇、勤、に、挨拶、し、回、國、の、諸、侯、あり、
 史、節、を、あ、ら、る、と、奉、望、の、至、り、と、云、け、る、お、主、計、取、あ、ら、ん、と、
 君、の、雷、名、を、國、に、高、く、主、君、不、肖、を、れ、た、賢、を、さ、し、能、を、愛、む、
 何、卒、貴、所、主、君、の、懇、情、を、憐、み、一、臂、の、力、を、助、て、國、を、治、め、乱、
 を、制、し、國、民、を、安、育、さ、し、め、ら、し、と、某、に、命、し、て、伊、佐、仕、
 已、後、之、と、の、事、に、以、ち、形、く、ハ、守、屈、ぬ、れ、と、命、を、奉、り、述、け、る

に長尾隆元雖有忍公の賢直に比へども、兵書物のとにてな
 る軍形申く大場へ押中して、全く勝利を得ると我ら
 らも号東あり、所なにいなる何方へも仕度の際更くあし
 清深志の清隆に、浪人の某方一合我國事の評議不決と
 あら、其時寸志の密謀何程も申上へし、とて、忍公の某務
 屋の外抱られんとあら、早速御法仕へし、此方披居向
 ふへしと、海面に赤色を懸し、御着とらそらへて、跡以の
 外輕忽あり、平野つらく、極子を見て、誠は人ハ少と見との
 相違あり、一時名をつまされ、傷者あり、立向て、此赴相違
 んと、面不終後をとり、けらひ、候々の應答某通一取り、届
 たり、尚又忍公に、いりて、清隆不系多へしと、立帰れ、監物
 ハ門前と送、出て、市前のそ尾直くと、偏の河を、舟、遙に見

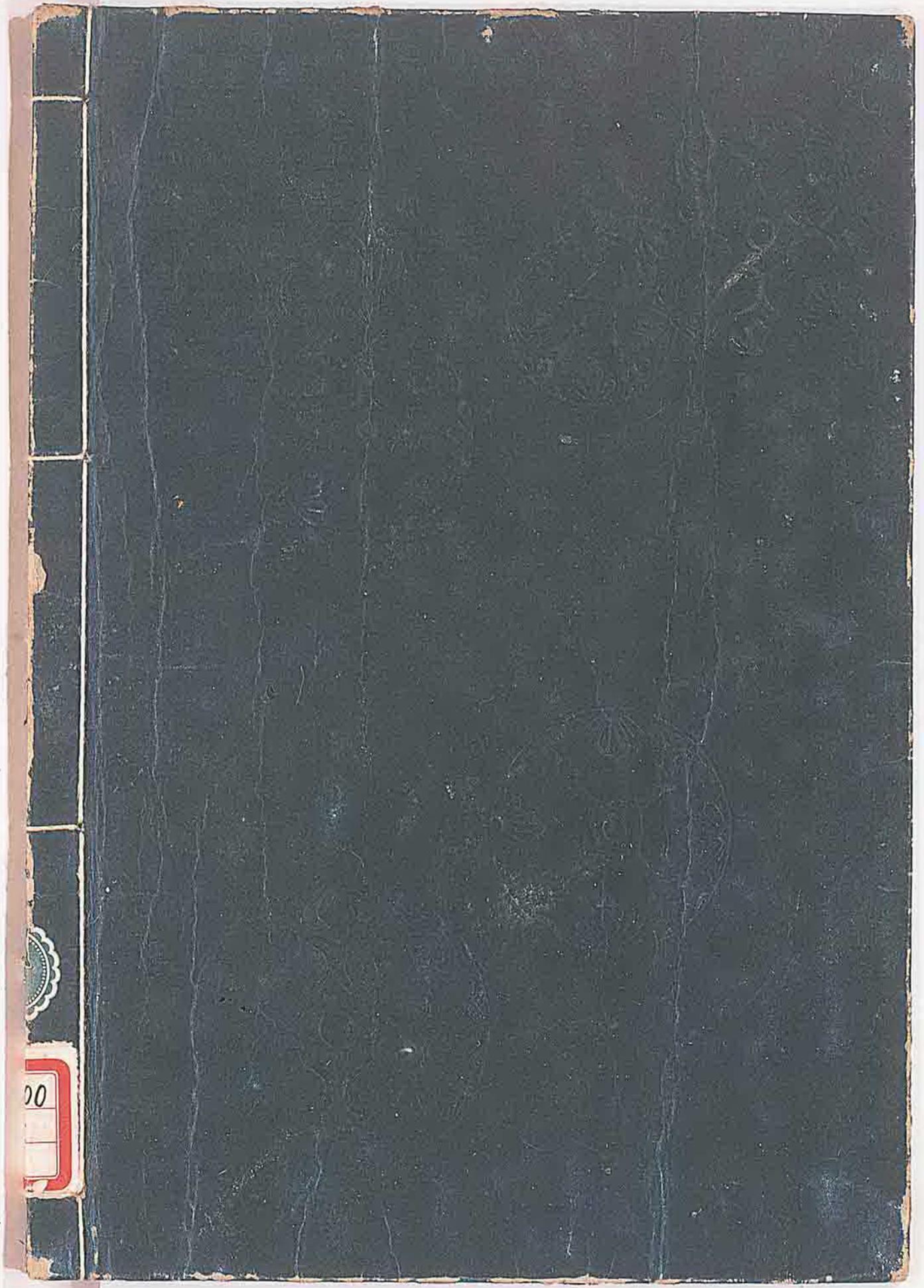
送り立入れ、小楠末七郎不審氣に、先生の法挨拶、何れ果
 かに、胸不、あ、い、う、る、分と、尋れば、監物、後、今日、の、使者
 ハ、吾、於、堂、セ、ハ、家、臣、と、云、り、領、堂、セ、さ、る、時、ハ、押、返、し、て、大、軍
 に、て、政、信、討、果、止、計、畧、あり、た、と、云、五、十、百、來、る、と、も、物、の、數
 に、あ、ら、存、在、隠、便、に、事、を、濟、ん、と、淺、智、を、あ、ら、か、し、帰、し、り
 と、傳、け、れ、バ、小、楠、横、手、を、拍、て、う、く、も、さ、ら、り、あ、ら、拍、子、給
 れ、大、戦、場、へ、出、立、た、百、抱、ん、と、あ、ら、ハ、妙、何、も、う、ら、ひ、の、う、さ
 さ、む、り、る、為、あり、必、途、申、の、討、ま、も、平、時、高、細、を、拍、後、那、後
 海、で、ハ、立、向、ん、然、古、智、謀、の、將、あ、れ、ハ、い、川、り、り、と、捲、り、す、ら
 ず、討、子、を、差、向、ん、其、内、に、吾、く、ハ、此、所、を、立、去、て、一、色、と、二
 色、に、あり、鐘、を、早、く、造、立、せ、と、未、終、に、足、ぬ、さ、て、後、に、れ
 ハ、半、七、良、感、也、と、云、ら、ハ、旅、途、の、倦、し、ん、と、曰、人、の、家、來

をひいて即日にお立ち寄り。去程に平野主計の長尾が宅より
 里五ゆり。乃ち岡本に出會て。監物より告ぐる。喬細に語り
 ぬ人室掃城して。其趣を祈れ。大田原大に尋ねて。あられに
 中へ扱れ。此は風信を示し。追逐して討ちをせよ。是れ
 に立退ん計畧あり。押進て今宵の内。一搦お果せと。あは
 つく下志をなす。ければ。あ人主候業。申して。のみにもんで
 押寄せ。長尾の宅。近くるれば。殿より更に及らり。本陣に
 大音上て。長尾監物の頭家より。両方まで。兵補にあり。り
 乃常に懸掛れ。同音に呼はつ。家の内。よて。高く。と。打
 ひ命。知。その。愚。人。系。の。れ。や。手。並。を。み。と。ぐ。と。と。云。色。に。際
 ぶ。と。り。と。押。ひ。け。け。ば。長。尾。と。見。く。を。く。一。る。子。年。一。指
 たり。岡本下知。り。して。誰。ある。あ。れ。お。と。れ。と。呼。ひ。れ。ば。赤

彦甚右衛門。獲て。去。一。番。に。欠。の。家。を。ね。ら。ひ。借。さ。る。鉄。炮
 を。扱。て。放。せ。ば。赤。彦。胸。板。お。ぬ。れ。其。後。を。こ。に。任。れ。ぬ。と。す
 付。さ。る。鉄。炮。の。者。其。業。の。ゆ。る。と。と。よ。事。大。に。執。り。ひ。る
 む。取。に。宇。都。宮。の。城。中。より。太。鼓。を。打。鐘。を。な。ら。し。二。百。騎。討
 の。軍。勢。隊。伍。を。不。礼。押。出。せ。ば。赤。彦。は。是。に。執。り。搦。合。を。め
 合。ふ。其。所。へ。金。幣。を。切。て。放。せ。ば。數。十。の。矢。先。一。度。お。終。り
 て。西。の。如。く。何。ら。い。り。て。あ。ら。あ。ん。一。回。に。敗。走。し。三。町。計。退
 て。一。川。の。邊。を。小。楠。に。とり。備。を。立。んと。す。取。に。敵。の。内。を
 一。聲。の。鉄。炮。を。打。出。せ。ば。四。音。に。太。鼓。を。合。内。て。相。圖。と。を
 が。く。火。を。上。れ。ば。彼。の。邊。の。邊。の。影。も。て。も。一。回。に。火。を
 上。て。太。鼓。の。調。子。を。録。川。次。守。に。を。寄。る。勢。に。大。將。始。り。終
 れ。あ。る。時。な。れ。ば。一。先。曳。と。い。ふ。程。を。あ。れ。敵。に。崩。れ

つゆらるゝおれふと廿一人鯉波城作り立、太鼓を打りし。
 木の根をこき、奇兵を寄せ、那須勢兵雷の落つるふん
 地して人をれをおて敷せし。且昔よりけりけり也。
 以の俚語、那須の孤軍と云ける。此我のとあり。是も尾
 り謀にて、那須より宇都宮を傾ふ為に、長尾を討と告し人
 數を多く出せりと云ふりし。城中へも長尾相尋、旗槍を
 相圖に軍立あるへしと約儀して、諸こそ思のゆゑに、大勢
 を破りけり。

83



00